泉州本伊勢物語

泉州本・伊勢物語・非賣品・五百部限定版

發行者・岡田米雄・東京市澁谷區若木町九・國學院大學內
市川章雄

印刷日・昭和十六年二月八日・

發行日・昭和十六年二月十三日・

印刷所・明文舍・東京市麻布區新廣尾町三ノ八七

發行所・國學院大學學術部・東京市澁谷區若木町九

泉州本伊勢物語解説

武田祐吉

伊勢物語の本文として、初冠に始り臨終に終る構成は、その物語の主人公の一代記として意味のある組織であり、この形式が、他の形式を壓倒したのは尤なことである。さうして朱雀院本と稱するは、大樣この形であると傳へ、いはゆる朱雀院の塗籠にあつた本は、この物語の傳來史上重要なる位置にあることを見る。その本に關しては、大島雅太郎氏藏、傳藤原爲氏筆本の奥書にも見えるが、誤寫があると見えて文意の疏迪を闕く。傳爲氏筆本の本文の第一團が、同じく初冠に始り臨終に終つてゐるのは、朱雀院塗籠本型であるが、この本では果してさうであるといふ説明は附かない。またその本に見える皇太后宮越後本も、如何なる本であつたか明にし得ない。

このごろ泉州から、はる〴〵と我が許を訪れた伊勢物語がある。織物の表紙を纏つてゐるが、これは後人の仕立であらう。縱七寸八分横五寸五分、四半形胡蝶裝一帖、料紙鳥の子一面九行（勘物のある處は行數が多い）兩面書、黑付九十八葉の完本で蠹蝕はかなり入つてゐるが、落丁は無い樣子である。書寫の時代は記事が無いが、大體鎌倉時代中期頃と

思はれる。やはり初冠に始り臨終に終る本文があつて、次の如き奥書を有してゐる。

この本は朱雀院のぬりこめに紙屋かみにかきてありしをみつからのときゝしかはかきうつしたる高二位のいゑの注にもかくそかきたるとあれとまたかの葉平（ママ）のみつからのてしてかきたる本はことにあるをかきそえたり又みあれの内侍のかきたるもありおほろけならぬ本ともなり

これを傳爲氏筆本の奥書にある文と比較するに、もと同文に出たものとおぼしく、この奥書の文の方がよく意味が通ずる。「朱雀院の塗籠に紙屋紙に書いてあつた本は、業平の自筆だと聞いたから書寫した。又高二位の家の註にもさう書いてある」ともとの本にあるが、業平の自筆本に變つてゐることをこの本には書き添へてある。又みあれの内侍の書いたのもあつて尋常で無い本どもであるといふのであらう。

この業平の自筆本には違つたことが書いてあるといふのは、多分本文中の、むかし右近のむまばのひをりの日の段の記事をいふのであらう。即、その段の後に、その日の作法の事を詳しく書き、業平集をも引き、さて次に、

葉平（ママ）自筆にかやかみにかきたる本朱雀院のぬりこめにありける伊勢物語にもてつかひとそありける古今にはひをりのひとある如何

とあるを指してゐると思はれる。この文は傳爲氏筆本にもあつて、これに依れば、この本文が朱雀院塗籠本で無いことを語ることになる。しかしこれは藤原範兼の和歌童蒙抄に、

業平ガテヅカラカミヤガミニカケル伊勢物語の朱雀院ノヌリゴメニアリケルニハ只右近ノ馬場ノ

日ムカヒニタテリケル女ノカホシタスダレヨリホノカニミエケレバトゾカケリケル

とあつて、また相違してゐる。

この本の內容は、初冠に始り臨終に終るのであるが、これを定家本に比するに、次の如き相違がある。

一、第八十一段の次に、あめのいみしうふりくらしての一段がある。

二、第百段の次に、むかしおとこ女のうひもきけるをの一段があり、或本在之と記してゐる。

三、第百十七段の次に、むかし女をぬすみて、むかしおとこ女をようし、むかし仁和の御門、むかしにしの院といふところに、むかしおとこある人にしのひて、むかしありけるいろこのみなりける、むかしおとこならの京に、むかしおとこ侍ける女のもとにの八段がある。但し右のうち仁和の御門は定家本の百十四段である。また侍ける女のもとには同じく第三十段であり、この本のその位置にもあるが、それには後半が無い。

四、第百十八段の次に、むかしすき物ともあつまりて、むかしおとこすゝろなる所にの二段がある。

つまり定家本に比して、十二段多いことになるが、共に有る段でも、詞句の相違などの多いものがある。殊に第六十段、第百五段などは非常に變つてゐる。さてこの本にある十一段について他本との關係を見ると、第一項の一段は傳爲氏筆本の第一團の本文中にあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

り、第三項の八段は、同本の等二團の本文、卽、皇太后宮越後本から出たと見られるうちにあり、第二項第四項の三段は、同上の小式部內侍本から出た中にある。傳爲氏筆本にある皇太后宮越後本から出た十二段は、定家本にあるもの四段、無きもの八段であるが、この本は全部これを有してゐる。而してこの本では傳爲氏筆本のやうに、別の位置に載せてゐるので無くして、定家本にある一段を除いては初冠から臨終に至る本文組織の中にこれを有してゐるのである。外に小式部內侍本にあるもの五段を有してゐるが、その一には或本在之とあつて校合に依つて入つたものであることを語つてゐる。かやうな關係にあるので、この本は大體皇太后宮越後本系統に近い本と見てよいであらうと思ふ。

この本に就いては、まづ傳爲氏筆本との比較が考へられるのであるが、相違は少く無い。元來單純な本では無いらしく、他本との校合を有してゐる。例へば第十九段、

あまくものよそにのみしてふることはわかゐるやまのかせはやみなり
とよめりけるは又おとこある人となんありける

とあるもの、傳爲氏筆本では、

あまくものよそにのみしてふる事は我ぬるやまの風はやみなり
とよめりけるはまたおとこあまたもたりける人になんありける
ある本とよめりけるはまたおとこある人となんいひやりける

とあつて、ある本とある方に近い。また第二十六段、

おもほえす袖にみなとそさはくらしもろこしふねのよりしはかりに

とあるもの、傳爲氏筆本では、

おもほえす袖になみたそさはくらしもろこしふねもよりしはかりに

或本にはそてにみなと　よせつはかりに

これも或本の方に近い。後人の勘物も多く入つてゐるがこれも傳爲氏筆本と一致するものとしないものとがある。一致するものとしては、例へば、第五段むかしおとこありけりひんがしの五條わたりにの章の次、及び第六段むかしおとこありける女のえうましかりけるをの次にある世繼大鏡の文は共にある。かやうな共通してゐる勘物も多いが、一方的にのみあるものもある。歌の上に出所を註してゐるのは、兩方ともあるが、この本には新古今と註してゐるもの九首あるに對して、傳爲氏筆本には一つもこれが無い。卽、この本の勘物は新古今以後にまで下るものがあると云へるであらう。また奥義抄を引いてゐる處があるが、これも傳爲氏筆本には無い。おもしろいのは、勘物のうち、前半が同文で、後半の違ふもののあることである。第六十五段の勘物に、前半は同じくて、後半この本、

たゝし直子たれ人のむすめにか古今の目六にこれをしるさすこの女もし直子にあらすはこと人の歌を誦けるよしかきつけたるか

云々とあり、傳爲氏筆本には、

私云北女直子也二條五條兩后之姪女淸和天皇之寵女直子は困香內侍のむすめとあり

とある。

かくの如くこの兩本は、もと同一の本より出で、後別れて相違點を得るに至つたと思はれ、その原本としては右近の馬場の日の條に兩本とも朱雀院塗籠本に依る勘物を有してゐる點に疑問はあるが、そは本文を古今集に依つて改めたものとして、やはり朱雀院塗籠本に出てゐるのではあるまいか。その本と高二位とが如何なる關係にあるかは未詳である。世に朱雀院塗籠本と稱せられる不忍文庫舊藏本の奥書に、

此本者高二位本朱雀院のぬりこめにおさまれりとぞ伊勢物語可秘也

とあるは、他の奥書を誤讀して書いたもののやうで信を措き難い。しかし高二位、高階成忠は、伊勢物語と緣の深い人である。高階氏は天武天皇の後承和十一年高階の姓を賜ふ。岑緒の子茂範、茂範の子師尙、師尙實は業平の子であるといふ傳がある。師尙の子良臣、良臣の子成忠である。そこで高階氏に取つては、伊勢の物語といふは、その祖の生れた物語になるのである。

かの泉州から來た本には、むかしおとこ女のうひもきけるをの段には、或本在之とあり、傳爲氏筆には、むかしおとこひさしくをとせて、むかし女のあたなるおとこの二段

には或本有之とある。また泉州の本に、

なかそらにたちゐるくものあともなく身のはかなくもなりぬへきかな

あふ事はたまのをはかりおもほえてつらきこゝろのなかくみゆらん

なとてかくあふ事かたみとなりにけむ水ももらさしとむすひしものを

の肩には、いづれも在端、又は端在之とある。もと紙端にあつたものを、いつしか本文中に持ち來つたものと見える。みあれの内侍か、皇太后宮越後か、小式部内侍か、いづれの人の手とは知り難いが、かやうな人々の手を經る毎に、物語が增益されて行くのである。かやうな數種の傳本を集め、これを重ね視て共通してゐるものを原形として他を捨てる作業が考へられるであらう。

この文は國文學論究第十二號に「伊勢物語の成長とその剪定」と題して載せた文の一部である。今泉州本伊勢物語が印行せられるに當り、これに訂正を加へて解説に代へる次第である。

例　言

○伊勢物語の本文研究は、大岡山書店刊（一九三三）池田亀鑑氏著「伊勢物語に就きての研究」二冊並に附錄に、一應大成されてゐる。本書は、その一つの補ひとなる新資料である。それで、すべての點でなるべく原本の姿を寫さうと努めた。

○本書は、全卷にわたつて、本文と同筆の勘物・註・考異を持つてゐて、字の大きさに、凡そ五段の差別がある。活字によつてそれをできるだけ再現した。異體の假名は改めたが、假名遣始め用字はすべてもとのまゝである。原本の枚數とその裏とは、線の上に、數字と（ウ）の記號で示した。一行の字數は、原本のまゝ。虫損と不明の字とは□を以て現した。又、原本の明かな誤字は、（マヽ）として誤植との誤解を避けた。同筆の訂正・補入はなほした方をあげ、注意すべきものだけ頭註した。

○頭註には、下の本文に相當する天福本の段數を〔――〕であげた。天福本にない段には〔ナシ〕とし、その下にそれぞれその段のある本の名を擧げた。註は、讀解の困難なもの・みせげち其他について記した。又、「伊勢物語に就きての研究・校本篇」、「參考伊勢物語」等によつて、氣附いた點を註してみた。主として、大島本系の本との異同に注意したが、煩雜を避けて全部は擧げなかつた。段の位置の異同も天福本にない段は省略した。

○寫眞版は十枚目表である。

四〇年十二月

佐藤謙三
松永立木
千勝重次

泉州本伊勢物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

〔一〕　2ウ

「□」よくよめない。

3

むかしおとこうゐかふりしてならの
京かすかのさとにしるよしゝてかりに
いきけりそのさとにいとなまめきたる
をむなはらからすみけりこのおとこ
門□（かいはむ）（まイ）かいはみてけりおもほえすふるさとに
いとはしたなくてありけれは心ちまとひに
けりおとこきたりけるかりきぬのす
そをきりて哥をかきてやるそのおと
こしのふすりのかりきぬをなんきたり
ける

〔二〕

ウ

かすか野ゝわかむらさきのすり衣
しのふのみたれかきりしられす
となんをいつきていひやりたるついて
おもしろきことゝやおもひけむ
古今河原左大臣歌也　寛平七年八月十五薨　今案於在中將非先達如何
みちのくのしのふもちすりたれゆへに
みたれそめにしわれならなくに
といふ歌のこゝろは忍なりむかしの人は
かくいちはやきみやひをなんしける
むかしおとこありけりならの京はな
れこの京はひとのいゑいまたさたま

天福本「その女よ人にはまされりけりその人かたちよりは心なんまさりたりける」大島本系も「その人（なん）」とし、「かたちよりは云々」あり。

大島本「あめそほふる」神宮文庫本「そはふりける」。

〔三〕

4

らさりけるときにしの京に女ありけり
その女よの人にはまさりたりける
ひとりのみもあらさりけらしそれをこのまめ
おとこうち物かたらひてかへりきていかゝ
おもひけん時はやよひのついたち
あめそほふるにやりける
古今第十三　業平朝臣
おきもせすねもせてよるをあかしては
はるのものとてなかめくらしつ
むかしおとこありけりけしやうしける女の
もとへひしきといふ物をやるとて

〔四〕

ウ

大和物語

おもひあらはむくらのやとにねもしなん

ひしき物には袖をしつゝも

二條后　長良中納言女　清和后　陽成母　高子

二條のきさいのいまたみかとにもつかうまつらてたゝ人にておはしましける時のことなり

五條后　順子

むかしひんかしの五條におほきさいの宮のおはしましけるにしのたいにすむ人ありけりそれをほいにはあらてこゝろさしふかゝりける人ゆきとふらひけるをむ月の十日はかりのほとにほかにかくれにけりあり

大島本系「まへのむめの花」他本「むめの花」。大島本「なるに」。神宮文庫本「なるを」。

5

ところはきけと人のいきかよふへき所
にもあらさりけれはなをうしとおもひつゝ
なんありけるまたのとしのむ月にまへの
花さかりなるにこそをこひていきて
たちてみれとこそににるへくもあらす
うちなきてあはらなるいたしきに月の
かたふくまてふせりてこそをおもひいてゝ
よめる
古今第十五　業平朝臣
月やあらぬ春やむかしのはるならぬ
わかみひとつはもとの身にして

〔五〕

ウ

とよみてよのほの〳〵とあくるになく〳〵
かへりにけり
むかしおとこありけりひんかしの五條わ
たりにいとしのひていきけりみそかなる
ところなれはかとよりもえいらてわらはへの
ふみあけたるついちのくつれよりかよひ
けり人しけくもあらねとたひかさなり
けれはあるしきゝつけてそのかよひちに
よことに人をすゑてまもらせけれはいけ
ともえあはてかへりけりさてよめる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook